

令和元年5月20日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02337

研究課題名(和文)「失敗者」と「逸脱者」が紡ぎ出すアメリカ文学

研究課題名(英文) Gathering the threads of Losers' Stories: American Society and its Deviants

研究代表者

久保 拓也 (KUBO, TAKUYA)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：80303246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は米国社会と文学における「失敗者」と「逸脱者」の表象に着目する。米国の特徴は「成功」に取り憑かれた社会であること。またその歴史は少数の「成功者」のあり方を重要な規範とすることで発展してきた。だが国家の物語は「その他多数」を構成する、様々な意味の「失敗者」や「逸脱者」が残した「顧みられない歴史」の中にも存在する。当研究は「成功者」と「失敗者」の両面を生きた、後者の心情をより深く熟知したマーク・トゥェインやウィリアム・ディーン・ハウエルズなどの作家が残した文学作品の中に、また実際の「失敗者」や「逸脱者」が残した文書に、「困難を生きた多数」の記憶と記録が紡ぎ出す「国民の物語」の重要性を探る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は米国社会とその文学において顧みられてこなかった「失敗者たちの歴史」を米国最大の国民作家マーク・トゥェインとその関連する作家の作品に見だし、アメリカを見つめる新たな視点へとつなげる試みにおいて独創的である。またこれは「男性性研究」と「障害学」を視点とする文学研究を進展させ、独自の地平を示すものとなる可能性をもつ。本研究はアメリカの人々の「規範への遵守」を試みる営みが、そこからの「逸脱」を促進するという矛盾するダイナミズムにこそ米国という国家の本質が表象されることを明らかにする。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the representations of "losers" and "deviants" in American society and her literature. America is a society obsessed with success. And her history has developed by making a small number of successful people as their important role models. The story of the nation, however, also exists in the neglected history left by the society's "losers" and "deviants," who constituted what is termed "many others." This study explores the importance of those neglected stories told in the actual documents that those "losers" left, or in the literary works of such eminent writers as Mark Twain and William Dean Howells, who were able to show deeper understandings of those people's sentiments.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 男性性研究 障害学 リアリズム文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

当研究は米国人作家マーク・トウェイン(1835-1910)と彼の同時代作家たちの作品を主要な研究対象としている。テキストの精密な読解を最重視する一方で、論考の実証性と理解度を高める目的から、より客観的な論述を可能とするため社会学な理論や観点を積極的に取り入れてきた。文学作品を深く考察する際に、その内部に可視化された、あるいは不可視な形で描かれている様々な社会的な差異を無視することは出来ない。例えばそれは「人種」であり「ジェンダー」、そして「階級」など多岐にわたる。その内「ジェンダー学」によりその存在の再定義を受けた「男性」の多彩な表象やその社会的問題を読み解く「男性性研究」を文学研究における重要な視点として考え、アメリカ人作家と作品を深く理解するための研究を進めてきた。「男性」が多くの社会における強者であり、また支配的な立場にあったことは否定できない。だが文学作品において「弱者」としての男性が描かれていることもそれがまるで当然のことであると受容されてきている。当研究はアメリカ社会における「失敗者(failure)」、あるいは社会が求める様々な「規範(norm)」に自らを合わせることができない「逸脱者(deviant)」たちの文学作品における多様な表象を考察することで、顧みられることの少ない「困難を生きた多くの男性たちの歴史/物語」を読み解くことを目的とした。

2. 研究の目的

「成功」することが社会において重視されることは普遍的なものであるとも考えられる。特にアメリカ社会においてその傾向が強く、「成功と失敗」ととりつかれた社会であることはこれまでも度々指摘されている(例えば Banta, Martha. *Success & Failures in America: A Literary Debate*, 1978)。アメリカ文学において特徴的と言える文学形式に「自伝」がある。当然のことであるが社会的な成功を収めたものがその形で自らの歴史を残す権利を得ることが多く、一方の「失敗者」がその声を残す機会に恵まれることはあまりに少ない。一つの方法として、いわゆるアメリカにおいて家柄や環境に恵まれなかった中、独自の方法で成功を勝ち取った経験を持つ、いわゆる "self-made man (たたき上げの男性)" の範疇に入れられる作家が示す視線が「成功」と「失敗」の両面をより詳細に語っていると予想できる。そのような作家の中でもマーク・トウェイン、そしてトウェインの才能を見だして文学の世界へと深く引き入れることとなった盟友であり、また自身も彼と類似した境遇の中から文学界で地位を築いたウィリアム・ディーン・ハウエルズ(1837-1920)らの作品を読み解くこと、及び、失敗者として生を終えることとなってしまった人物が残した私的な文書(手紙)などを読み解くことを通じ、アメリカ社会と文学における「失敗者」「逸脱者」の実像に迫ることを主要な目的とした。

3. 研究の方法

信頼できる資料の収集と精査に努めることから研究を開始する一方で、国内外の学会における成果発表を精力的に行った。トウェインの作品はこれまで刊行された作品については幸いそのほとんど全てが現在でも入手可能である。だがトウェインに関して特徴的なのは未刊行作品が多いことと、それに加えて手紙などの私的な文書が膨大な分量に及ぶことである。手紙や備忘録の一部分は刊行され、またオンラインでも利用可能なものがあるが多くは所蔵図書館における閲覧が必要になる。それらを所蔵する図書館での綿密な調査と、その所産をいち早く発表するための国内外の学会発表、またその成果の論文発表を行った。未刊行の資料の収集についてこの研究で特徴的なものは、トウェインの兄であり、トウェインが作家として飛躍するための原点を与えながら、自身は「失敗者」の烙印を押され、恐らくは深い失意のままで生涯を終えることとなってしまったオリオン・クレメンズの書簡についての調査である。カリフォルニア大学バークレー校のバンククロフト図書館内にある「マーク・トウェイン・プロジェクト」にはオリオンの手紙が、特にトウェインが保存していたものを多数所蔵している。それらの手紙は、これまでも研究者によって利用され、その一部分が公開されてはきたがその全てがデータベース化されているわけではない。当研究はその資料に目を向け、精査するには必ずそれらをテキストデータ化することを行っている。資料を研究のために「消費」するばかりではなく、利用可能な新たな形のものへ「生産」し、その利用を再活性化することを目指した。

4. 研究成果

初年度(2015年)は主に米国における資料の収集と分析の充実と同時に国内外の学会における研究成果発表、および、学術雑誌における研究論文の発表をおこなった。この年の5月に日本英文学会第87回全国大会(東京・立正大学)におけるウィリアム・ディーン・ハウエルズを中心に扱うシンポジウム(第9部門「かくも長き無視の果てに—William Dean Howellsの真価を求めて」)において、発表を行うことが出来た。シンポジウム全体が目指したのは、現在の日本において、あるいは米国においても顧みられることのなくなったハウエルズという作家への正当な(再)評価を目指すものであった。当研究から貢献できたものとしてはハウエルズが持っていたトウェインへの多大で多分にポジティブな影響力、また作家同士のものとしては異例と思えるほどに深く、また長きにわたって続いた二人の交遊の考察に加え、ハウエルズが南北戦争後のアメリカ社会における「成功」と「失敗」という問題を扱った代表作『サイラス・ラパムの向上(*The Rise of Silas Lapham*, 1885)を、同年にアメリカでの刊行となったトウェ

インの代表作『ハックルベリー・フィンの冒険 (*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)』と比較することで、アメリカ社会に対する二人の視点を(あらためて)明らかにすることを試みた。また同年7月にトウェインが少年時代を過ごした場所として知られているアメリカミズーリ州ハンニバルにおけるマーク・トウェイン研究の国際学会(The Second Clemens Conference)において、研究発表(“... with our joint instinct for failure”: The Fruitfulness of the Failed Collaboration of S. L. Clemens and W. D. Howells)を行った。この研究はハウエルズとトウェインがそれぞれ独立した活動において、あるいは、ハウエルズがトウェインの編集者として協力するときにはうまくいくが、共作を行う際にはあたかも運命的に失敗に終わってしまったことを、ハウエルズがトウェインの死後に出版した回想録 *My Mark Twain* (1910)において使った言葉“instinct for failure”をキーワードとして考察した。考察された作品は彼ら二人が共作したがほとんど上演されることがなく見捨てられることとなった戯曲 *Colonel Sellers as a Scientist* (written 1883)なのだが、ハウエルズが完全に手をひいとからもトウェインはこの作品にこだわった。トウェインは1892年に、この作品を小説化して出版したのだが、その理由と作品が持つ隠された重要性を述べた。また2015年11月に行われた日本英文学会北海道支部第60回大会におけるシンポジウム(「Dean Who?—幻の文豪 William Dean Howells の実態に迫る」)チェア: 上西哲雄(東京工業大学教授)において、発表をすることができた。この発表を元にした論考は同年度発行の『北海道アメリカ文学』第32号に収録された。

2016年度は、研究資料として重視しているオリオン・クレメンズの書簡の調査を中心とする資料精査をカリフォルニア大学パークレー校を訪れて行うことが出来た。この調査の成果は翌2017年に行われたマーク・トウェイン研究の国際学会 The 8th International Conference on the State of Mark Twain Studies において“Men were still monstrosities’: Mark Twain’s Views on Disabilities and Their Multifaceted Meanings”として発表することが出来た。アメリカニューヨーク州エルマイラ市のエルマイラ・カレッジで4年に一度開催される同学会は同作家研究の学会としては最大の規模となるものだが、その場においてトウェインが様々な「障害」というものに作家としてのキャリアを通して着目していたことを、初期の短編である“The Capitoline Venus”(1869)、や『ハックルベリー・フィンの冒険』などを題材として論述し、トウェインの記述には当時の人間の意識としては持つことが難しかったであろう、「弱者に寄り添う視点」などの先端的な視点が見られることを指摘した上で、障害を持つ「弱者」の描写が後期の作品においてはより深刻な意味を持つものへと展開されていくことを述べた。この研究がもつ発展の可能性について発信できる重要な発表とすることが出来たと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 久保拓也 「旅する未来のリアリストたち」『マーク・トウェイン 批評と研究』第17号、査読なし、2018、4-11、
2. 久保拓也 「トウェインの基準で読むハウエルズ—*The Rise of Silas Lapham* を例に」『北海道アメリカ文学』、第32号、日本アメリカ文学会北海道支部、査読なし、2016、36-50
3. 久保拓也 「*The Rise of Silas Lapham* を読む—本当に傑作といえるのか」、『第88回 Proceedings (付 2015年度支部大会 Proceedings)』、日本英文学会、査読なし、2015、139-40
4. 久保拓也 「William Dean Howells と Mark Twain」、『第87回大会 Proceedings』、日本英文学会、査読なし、2015、73-4

〔学会発表〕(計5件)

1. 久保拓也 「旅する(未来の)リアリストたち」日本マーク・トウェイン協会全国大会シンポジウム「ハウエルズ・ジェイムズ・トウェイン文学空間」2017年11月4日 関西学院大学
2. Kubo, Takuya. “Men were still monstrosities. . .”: Mark Twain’s Views on Disabilities and Their Multifaceted Meanings, The Eighth Conference on the State of Mark Twain Studies, 米国ニューヨーク州エルマイラ市、Elmira College、2017年
3. Kubo, Takuya. “With ‘Our joint instinct for failure’: The Fruitful Failure of the Collaboration between S. L. Clemens and W. D. Howells’ The Second Clemens Conference, 米国ミズーリ州ハンニバル市、Hannibal-LaGrange University、2015年.
4. 久保拓也 「*The Rise of Silas Lapham* を読む—本当に「傑作」といえるのか」、日本英文学会北海道支部第60回大会シンポジウム「幻の文豪 William Dean Howells の実態に迫る」、2015年、札幌市、北海道大学
5. 久保拓也 「William Dean Howells と Mark Twain」、日本英文学会第87回全国大会シン

ポジア第9部門：「かくも長き無視の果てに—William Dean Howells の真価を求めて」2015年、東京、立正大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。